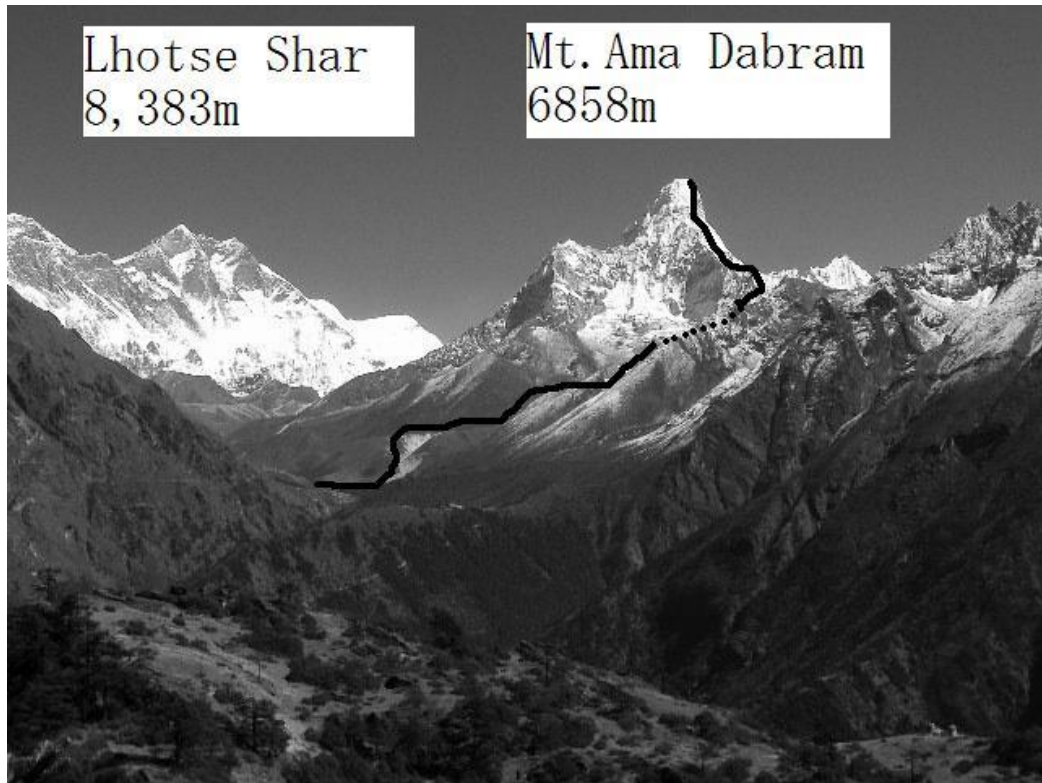


## ヒマラヤ・アマダブラム夢幻（2007年初夢）



（エベレストビュー・ホテルから望むアマダブラム、左はロツェ・シャル。黒線が今回の南西稜ルート）

宙に張り出した巨大な氷河舌端に危うく載っているC3（第3キャンプ）は生きた気持ちが全くしない地獄のような所であった。標高は既に6400m、呼吸が苦しい。横になると肺水腫が出るから、ザックに凭れて狭いテントの中で半座位でウトウトするしかない。ア～ア、登頂などはもうどうでもよいから、早くこの地獄から脱したい。時折ドーンという大音響が空気を震わせて震え上がる。雪崩の音である。このC3は、アマダブラム山頂から一気に500mほど落ちている懸垂氷河が狭いテラスを乗り越して宙に競り出して氷河舌端を作っているというきわどい位置に設営されているもので、テントも3張りが限度という猫の額であった。



（C3を設営した山頂直下の懸垂氷河舌端）



（C3の狭いテン場 mountain madness HPより引用）

いつ上からセラックが崩壊して襲われるやも知れず、また、テントが載かっている舌端がいつ崩れてもおかしくない。そうなればテントごと一気に2000mほど宙を飛んで下のミンボ氷河に叩きつけら

れるから、遺体も木端微塵になるに違いない。捜索隊も入れない危険な場所だから、バラバラになったまま氷河に埋まって氷漬けとなり、やがて数十年してから氷河の末端に流れ出るということになる。

あ〜あ、恐ろしや、恐ろしや。(実にそのとおりで、昨年秋に我々がアマダブラムの少し奥のイムジャ・ツェ峰(アイランド・ピーク)から下山した直後に、ここC3にキャンプしていたスウェーデン隊が落下してきたセラックに天幕を直撃され、天幕ごと吹き飛ばされてクライマーとガイド10人全員が遭難・死亡したというニュースを帰国後知った)。

アツツ！ゴーッときた！体が宙に飛ばされた！天地左右何も分からず真っ暗闇の中をぐるぐる回転しながら奈落の底に吸い込まれて行く……。一体何がどうなったのだ？段々気が遠くなってきた。オカアチャン！助けてくれエ〜！ 気絶するッ〜！！

……。というところで目が覚めた。寝汗をぐっしょり掻いていた。昨年の初夢(白馬岳・主稜)では何とか天辺まで這い上がったが、今回は氷河に氷漬けの夢であった。イカン、イカン、こんな夢を見るようでは精神が嬰退してしまっているのではあるまいか。心すべきことである。

アマダブラムは、8千メートルを越えるジャイアントが犇っているネパールのクーンブ・ヒマール山群の中にあつては標高こそ7千メートルに満たない低山であるが、隣のカンテガ峰やタマセルク峰と同様にヒマラヤ襞に覆われて天に屹立する秀麗な峰である。神々しく輝く山容は神々の座でもあろうか。四方にジャンダルム(前衛峰)を従えて聳える主峰のピラミッドはヒマラヤのmatterホルンとも言われている。昨年秋と2年前の春にヒマラヤを訪れた時この山に魅せられたので、将来是非登ってやろうと秘かに目論んで、昨年の時はイムジャ・ツェ峰へ向かう道すがら登路を目で追ったりガイドにいちいち確認したりして研究に余念がなかった。カメラを望遠にして、登路となる稜線や壁やテラスやリッジの写真も沢山撮った。

しかし、この目論見は時を経ずして悲しくも露と消え去ってしまったのである。イムジャ・ツェでは高山病のためにハイ・キャンプの少し上方で敗退せざるを得なかったことは別稿『参った、マイッタ、ヒマラヤ・イムジャツェ峰』で書いたが、たった6200mしかないイムジャ・ツェにも登れなくて何で7000mに近い山に登れようか。しかも、帰途カトマンズでエージェントに聞いたところでは、この山に登るには1人2万ドルが必要とのことで、超極細年金で糊口を糊している私は先立つモノの面でも全くお呼びでない。ガックリと肩を落としたが、マ、現実には現実として認めねばならないのである。

左様な訳で今回もまた見てきたような嘘を書きまくる破目になったことをお許し願いたい。ただ、ルートなどの詳細はカトマンズの登山専門書店で買い込んだガイドブックや地図、ガイドに教えて貰った情報、撮影した写真や衛星画像などの精緻な解析などを駆使して描いたものであるから、その辺のへなちょこガイドブックなどは足元にも及ばない程の正鵠を得たものであると確信している。(但し、ここに書かれた情報を参考に山行されて遭難されても、当方は責任を持ちませんので悪しからず)。

さて、夢の続きに戻ろう。

アマダブラムは四辺にジャンダルムを配した奇怪な蛸坊主のような山容であることは上の写真のとおりであるが、東稜、北西稜、南西稜、北稜の4ツがそれぞれジャンダルムを擁して天に突き上げ、その頂点がアマダブラム主峰6858mという塩梅である。シェルパ語で「アマ」とは母、「ダブラム」とは首飾りを意味し、母即ち世界最高峰のサガルマータ(エベレスト)の首飾りということらしいが、両肩にジャンダルムを上げたアマダブラムの姿はそれ自身がオッカサンの首飾りに似ている。ネパールではオッカサンは誰でも首飾りを着けているので、母の胸に抱かれた子供には首飾りは母の象徴であろうから、サガルマータを持ち出すまでもなく、素直に「母の首飾り」と解釈したい。見る方角によっては、ヒマラヤの大鷲が羽を広げて飛翔しているようにも見える。



(イムジャ溪谷沿いに、右からアマダブラム、ローツェ  
エベレストを望む)

(奇怪な姿のアマダブラム  
右はタマセルク峰)



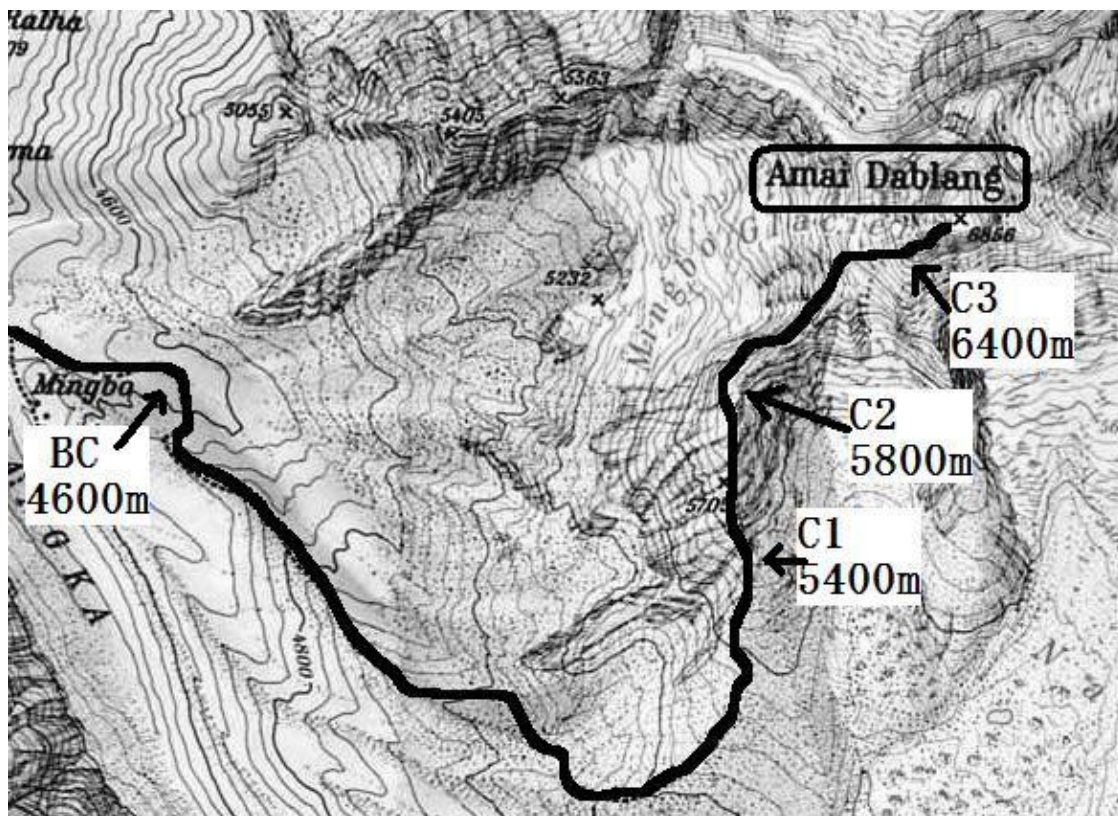
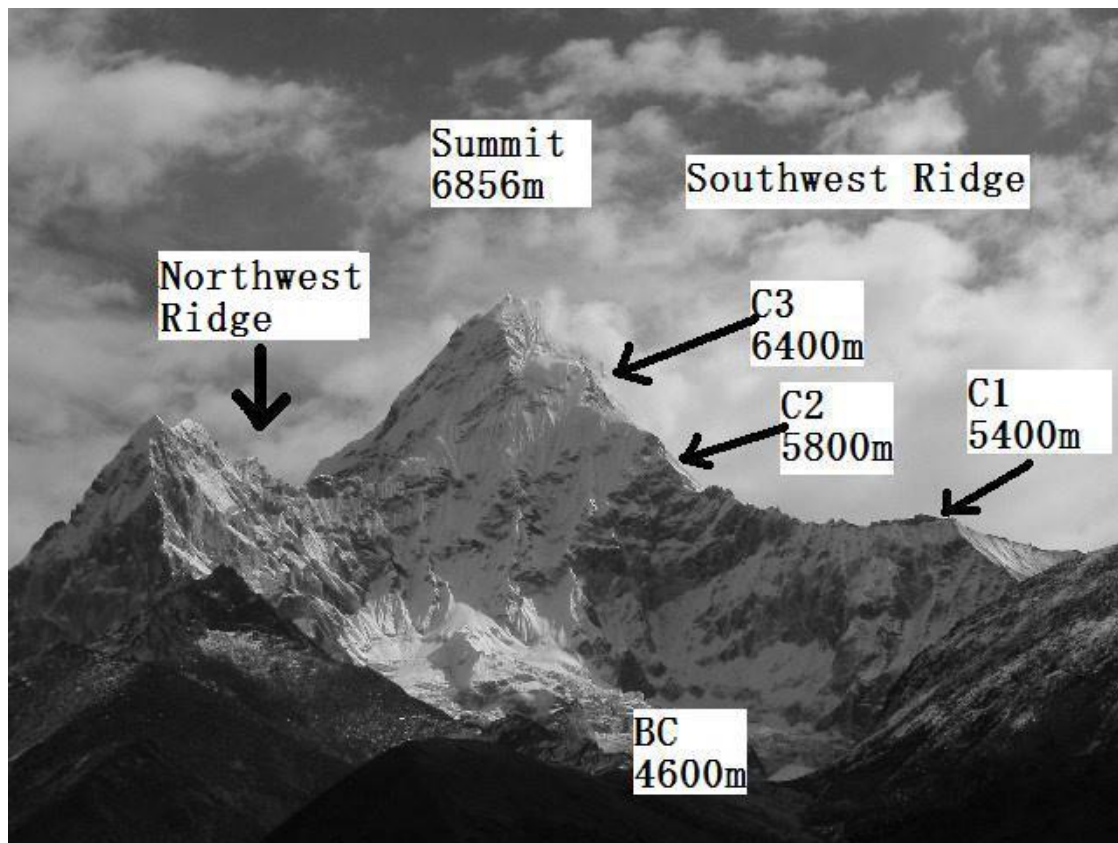
この4本の稜線のうち最も易しいルートが今回の南西稜でノーマル・ルートと呼ばれている。「最も易しい」とは言え、BC（ベース・キャンプ）からの往復だけで10～14日間を要し、カトマンズからは往復1ヶ月も掛かる長旅となる。登攀ルートもナイフリッジや狭いテラスや急なフェースや垂直カンテなどばかりで、しかも氷と岩のミックスときているから、その困難さは並大抵のものではないことは容易に想像がつく。

カトマンズから小型機でルクラまで飛び、ナムチェ集落、タンボチェ集落とエベレスト街道をキャラバンして、道がアマダブラム BC へ分かれるパンボチェ集落到着いたのはカトマンズ出発後4日目であった。ここで1日間を高度順応に充て翌々日よいよ BC へと向かったのであった。エベレスト街道から分かれてイムジャ・コーラ（イムジャ川）の河床まで下り、タルチョ（チベット仏教の幡布）がぶら下げてある小さな吊り橋を対岸に渡ってアマダブラムの懐深く登って行くのである。川は半分氷結していた。すぐ上のプラトーまで登るのがなかなかシンドイ。急坂の直登である上にガラガラしたガラ場であるから歩きにくい上に息が切れる。標高は既に4000mを越えている。プラトーから上はやや傾斜も緩くなってきたが、今度はガラ場に雪が薄く積もっていて、ここも難渋した。パンボチェから7時間も歩いたのだろうか、やっとミンボ氷河末端のBCに到着。氷河の上に泥が積もったモレーンの端で、見事なまでに殺風景な場所であった。ミンボ氷河の本体は、氷河流下の圧力でズバズバに切れたり盛り上がったたりして地獄の様相を呈していた。ここからはルートの全体は詳らかにには見えないが、真正面にはC3の巨大な懸垂氷河舌端がヌメヌメと青白く輝いていた。頂上はその陰に隠れて未だ見えない。

BCからは、右に廻りこんで南西稜に取り付く。頂上を踏んで再びここに帰着するのは早くても10日後であろう。天候待ちなどがあれば2週間となる。ガイド2人、ハイ・ポーター3人、それに小生の6人分の食料、テント、ザイルなどで相当な荷揚げ量となった。BCより上はゾッキョ（牛）は使えないからC1までの荷揚げに3日間を要した。ハイ・ポーターはC1までしか行かないから、それ以降はガイド2人と小生だけで荷揚げしなければならない。

C1は緩やかな南西稜の南部が急なナイフリッジに変わった場所である。ヒーヒー、フーフー言いながらナイフリッジに這い上がった途端、初めてヒマラヤの東方、南方の視界が飛び込んできた。目の前にはオンビガイチャンの秀麗な双耳峰、その先にはアンブラプチャ、バルンツェなどの6～7千メートル峰、遙か東にはヒマラヤ・ジャイアントの一つマカルー8475mが浮かんでいた。南に目を転ずればヒマラヤの最南部を縁取るヒンク・ヒマールの連山。右端にはカンテガやタマセルクも見えた。茫洋たるヒマラヤ山地に広がる墨絵の世界。どだい広さのスケールが日本の山と桁が違って、連山の重なりが地の果てまで広がっていた。水平線が丸く見えて、地球はやっぱ丸いという実感が迫ってくる。C1から上は、氷雪と岩の厳しい世界になる。小生作成の頂上までのルート図を次ページに掲げておく。





C1でハイ・ポーターを下山させた後、C2への荷揚げと高度順応を兼ねて南西稜のナイフリッジを登り、リッジが壁にぶつかった5800mにC2を設営してC1に戻る。この痩せ尾根は空身ならアンザイレンするほどではないが、荷揚げの荷物が重いので3人でアンザイレン。雪と氷と岩のミックスがいやらしかった。BCから上にはコックは同行していないので、ガイドが食事を作ってくれたが、やはり専門のコックの腕には叶わなかった。マ、ギリギリの食料しか荷揚げしていないので致し方なかろう。腐らないように味噌漬&真空パックにして日本から秘かに持ち込んだ牛の臓物をトンチャン（ホルモン焼）にしてガイドに試食させたら、連中、世の中にこんなに美味しい物があったのかと、ホッペタをボタ

リと落として喜んだ。彼らは聖なる牛は喰わない習慣だから、日本鹿の内臓と偽っておいた。



(絶頂の C2-5800m 後方はカンテガとタマセルク峰 National Geographic HP から引用)

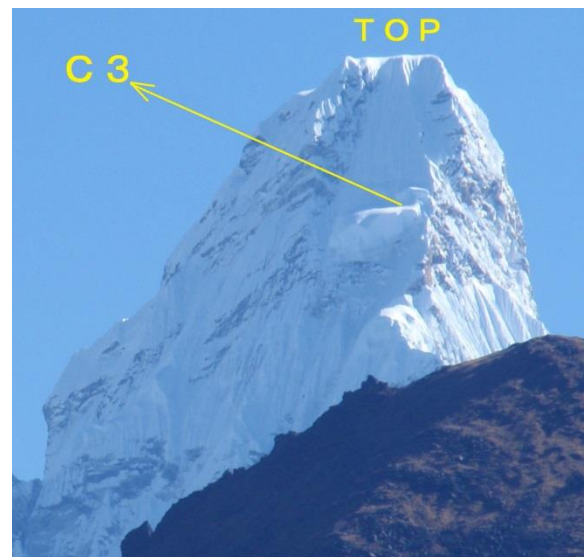
C 2 から上は、極端に痩せたスノーリッジになった。リッジの両側はスッポリと切れ落ちているので、靴が載るか載らないかぐらいの巾しかない稜線上を這うしかない。50mロープ5本を連続してフィックスにし、これを8回ほど繰り返してやっとC 3に入った。C 3の様子は上述したとおりである。

ここから頂上までが最後の核心部の壁である。この壁はC 3から頂上まで標高差450mもある巨大なフェースであるが、遠方から見るとノッペラボウの垂直な氷壁で、全く取り付くシマも無いように見えた。しかし神様はよく創ってくれたもので、中央ちょっと右に細い雪のカンテ（小岩稜）が1本直上していて、これを登るのであった。ガイドが張ってくれたフィックスロープをユマーリングで登るのであるが、既に標高は6500m、息が切れて息が切れて1歩毎に立ち止まって深呼吸する始末。ユマーリングで腕がパンパンになって感覚が無くなってきた。オーバー手袋をしている指先も凍りつきそうなくらい寒くて痛い。

目出帽から吐く息がすぐに氷結して鼻と口にツラ

ラがぶら下がる。それに凍結したロープはユマールが滑って効きが甘いので、一歩毎にピッケルを打ち込んでセルフビレーをとらねばならないので右手が棒のようになって全く他人の手ようになってきた。もう、イヤ〜んだ。勘弁してくれ〜。許して頂戴。ワチキは死ヌ、死ヌ、死ニンスよ〜。

小生は6000m以上の高度経験は初めてだから、C 3で又もや敗退かと覚悟だけはしていたのであるが、もうちょっと頑張れば何とかなるやも知れヌ。折角虎の子の2万ドルを払って来たのだから、元は取りたい。必死の覚悟でガイドに「ビスターリ、ビスターリ」を連発しながらも、やがてオーバーハング状の雪堤を乗り越えると急に傾斜が緩んだ。目の前にはもはや高みは何も無く、狭い運動場くらいの

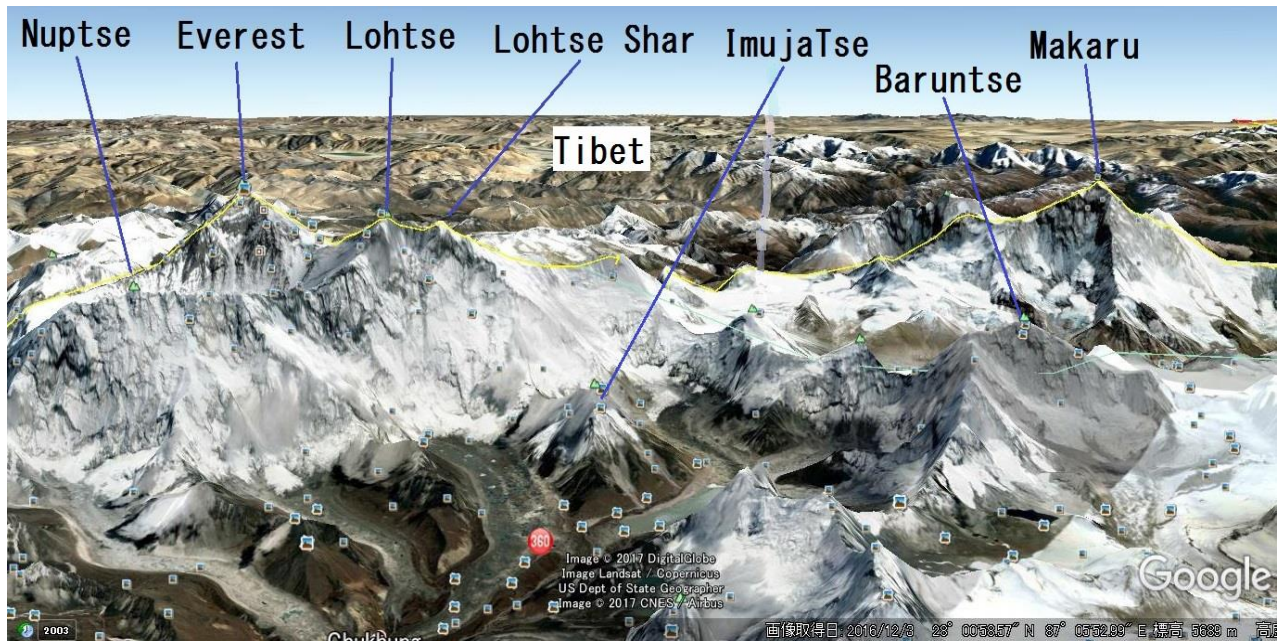


(C3から頂上へは、右側のカンテを登る)

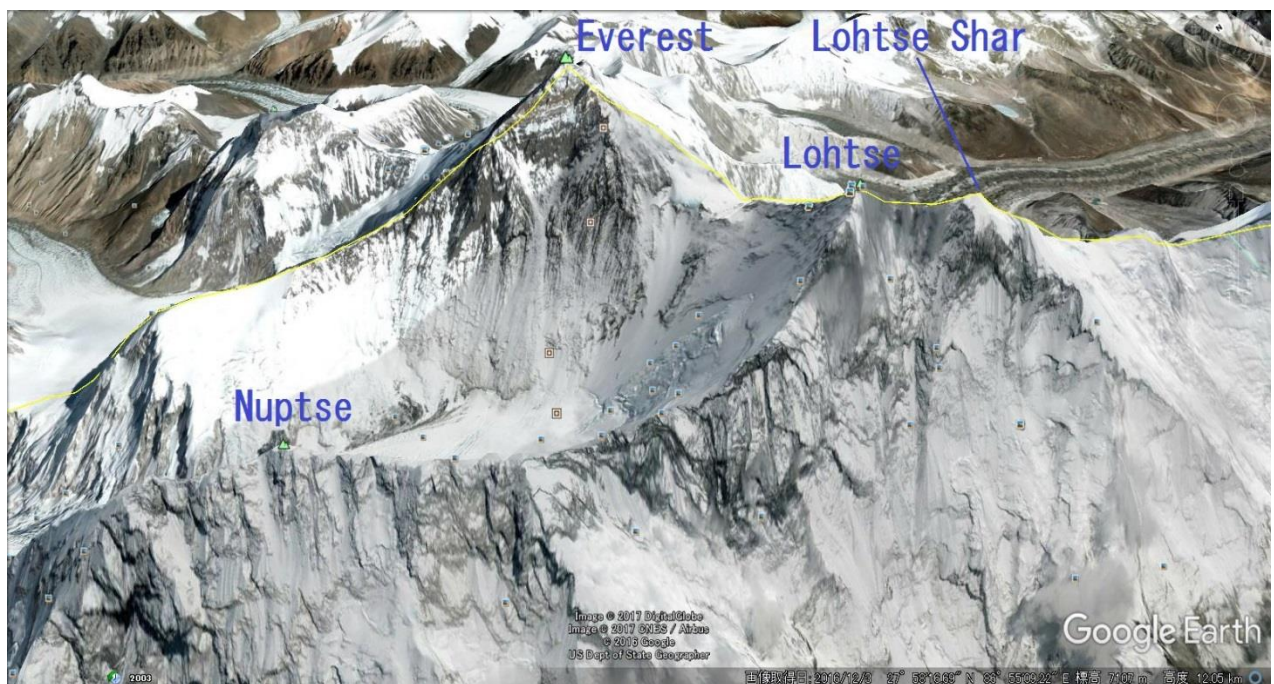


雪原が広がっているだけだった。頂上だッ〜！。やったア〜。先に登ってビレーしてくれていたチーフガイド、後から登って来たアシスタントガイドと抱き合って握手。涙で景色が霞んでしまった。ワーッと泣きそうになってきた。6858mの山頂！ 時に12時15分。C3を午前2時に出発して10時間、カトマンズを出発してから3週間が経っていた。

神様のご加護か紺碧の空には一片の雲も無い。遮る物も無い360度のヒマラヤの眺望。エベレストが一段と高い。その右にローツェ、マカルー、左にはヌプツェ、プモリ、チョー・オユーなどのジャイアント。しかし、寒くて寒くて長居はしておられない。手が凍りついて写真も撮れないから、ヒマラヤの山々を目に焼き付けて5分程で下山の途についた。



(アマダブラム山頂からチベット方面を大鳥瞰。ヌプツェからエベレスト、クンブ・ヒマール東端のマカルーまで)



(アマダブラム山頂からエベレスト南壁とローツェを望む)

下山するのもなかなかの難物であったが、カトマンズ出発後、無事25日目に下山路最初の集落パンボチェに帰着してガイドと共にヒマラヤの神様にお神酒を捧げ、そのおすそ分けで祝杯を上げたのであった。めでたし、めでたし。以上、2007年の初夢でありました。 (64翁 2007年元旦 記)

(このようなことばかり捻り出しておりますと、夢と現が渾然一体となって参りまして、何れが現であるのか、はたまた何れが幻であるのか、本人としては大変に幸せな気持ちの人生となるのでござります。瘋癲老人の気があります私メは本当の「アル耐はいま～」になってしまったのかも知れません。周りの皆様には全くのご迷惑さまでござりましょうが、何卒お許し願えれば幸甚に存じ上げ奉ります)

(本稿 完)

[「夢幻の山旅 私の机上登山」目次へ戻る](#)